

基底核を発動する連体修飾の検証

— 寺村秀夫の用例を対象にして —

樋 野 幸 男

0. はじめに

筆者は、本稿に先行して日本語における連体修飾(節)の構造を考察した。寺村秀夫を嚆矢とする先達が論究しなかった視点から《基底核》という概念を規定して、《総体修飾/基底核修飾》という2つの構造を提案した。その詳細は、拙稿「基底核を発動する連体修飾の幻影」(『富山大学人文学部叢書Ⅲ 人文知のカレイドスコープ』pp.2-14、2020年3月、桂書房(富山市)刊)を参照されたい。

本稿では、拙稿において幅広く用例を採取して検証ができなかったことを補完するため、寺村秀夫「連体修飾のシンタクスと意味—その1—その4—」(『日本語・日本文化』4~7号、1975-78年、本稿は『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』(pp.157-320、1992年、くろしお出版刊)による。)が「外の関係」の多岐にわたって収集した用例を検証していく。

検証する対象は、そのうち、連体修飾節と被修飾名詞(以下、主名詞と呼ぶ。)とが直接する用例に限定する。(「太郎が花子と結婚したという事実」の「という」および「ための」・「だけの」を挿入する用例は、除外する。)[「寺村秀夫の用例を分析する表」に分析の結果を掲載して、要点を簡潔に解説する。拙稿の提案に関する資料が提示できれば、本稿の目的が達成されたものとする。さらなる考察は、今後の課題とする。

1. 「寺村秀夫の用例を分析する表」凡例

〔頁/No.〕：寺村「連体修飾のシンタクスと意味—その3— 5. 外の関係」(前掲pp.261-296)に掲載された用例のページ数、および、用例の番号。

〔寺村秀夫の用例および備考〕：上記に掲載された用例。(全文、出典は省略した。)下線・二重下線で表示された修飾節と主名詞は、[(修飾節)] [(主名詞)] の形式で表示した。寺村の認定に従ったが、筆者が修飾節の認定を修正した用例がある。(備考に記した。)

備考は、それぞれの用例に関する解説を記した。

〔主名詞〕：寺村が対象とした主名詞。(1つの用例に複数の連体修飾が含まれる場合、寺村が対象としたものを本稿も採り上げた。)

〔主 体〕：ある名詞句(概念)に付随する別の名詞句(概念)が存するとき、前者(例：「人間」)を後者(例：「性格」)の《主体》と呼ぶことにする。そして、基底核修飾における主名詞とその基底核との関係をみると、基底核が主名詞の主体となることが支配的であるといえる。ただし、恒常的主体関係と、個別の文脈における臨時的主体関係とがある。(拙稿では「主体」について述べていない。)この項目では、上述の主体関係の状況を記した。恒常的主体関係：○、臨時的主体関係：●、事象付与作用となるゼロ基底核(=φ、〔基底核について〕を参照。)との関係：△、主体関係が認められない：×、と表示した。

〔基底核〕：基底核修飾を形成する主名詞を存立させるために不可欠なのが基底核である。基底核として提示した名詞句(など)は、相当する概念を暫定的に掲げたもので、厳密にそれであるこ

とを要求しない。また、修飾節の述語の項を基底核と認定するとき、それを《重複基底核》と呼び、{ } に入れて表示した。

〔構造〕：筆者が提案する連体修飾(節)構造の区分、総体修飾／基底核修飾。

〔作用〕：総体修飾／基底核修飾が有する作用の区分、限定／属性付与／事象付与。ただし、基底核修飾の用例については、修飾節が基底核に対する作用の区分を表示した。

〔関係〕：寺村の「内の関係／外の関係」の区分で、修飾節の基底核に対する関係を表示した。事象付与作用は「外」とする。「内外」は、いずれの性格も有することを意味する。ただし、筆者が総体修飾と認定する用例も含まれる。

2. 用例の分析から気づいたこと、少々

〔主体について〕主名詞に関して《主体》の概念を規定すると、その類型が観察される。それは、主名詞と基底核(=主体／非主体／ ϕ)との関係である。前述の凡例〔主体〕に4つの類型を示した。両者の関係は、主名詞と修飾節の叙述内容とによって個々に規定される場合もあって、普遍的な関係に限定されない。寺村(71)では、主名詞「覚え」と基底核「曲」とに主体関係はなく、後者は前者の単なる対象であるに過ぎない。一方、同(85)では、主名詞「作用」が基底核=主体「時間」なくして存立しない。主名詞が主体を有するか否かが、構造・作用を認定する重要な観点となる。

〔基底核について〕基底核修飾：事象付与においては、主名詞が修飾節に対して事象を要求する。そのとき、基底事象を形成するため、理論的にゼロ基底核(= ϕ)が発動する。また、基底核($\neq \phi$)が認定できる基底核修飾においても、主名詞の性状によって事象付与の解釈が可能となることが多く、唯一の解釈に確定できないことが本質かもしれない。

〔重複基底核について〕寺村(102)では、受容者が先行する修飾節の叙述を通過して「姿」に到達した時点で、その節の叙述する中核(対象)＝「宮女たち」が脳内に想起されて基底核が決定する。単純化した「宮女たちノ姿」の意味的關係が認識される。(修飾節の叙述する中核(対象)は、ガ格名詞句に限定されない。ヲ格名詞句をその中核(対象)とする用例も確認できる。)一方、文脈の支持もなく叙述の中核(対象)が見出せない用例では、事象付与とみなすことになる。ここでは、叙述の中核(対象)を「宮女たち」以外と理解することが困難なため、事象付与の解釈はできない。

〔「理由・原因・結果」について〕寺村の「相対性」名詞のうち、「理由・原因・結果」等は、前件と後件をもつが、両者とも事象付与の構造をとる。ただし、頻出／稀出の対立があり、後者が有標的处理をされやすい。寺村(175)は「…(略)…、韓国人のこういううらみが凝集した(a)ため、伊藤が暗殺された(b)(トイウ)結果になった。」と同様の主旨である。トイウを挿入した表現が多用されるが、挿入しない表現も適格である。つまり、「結果」は(a)前件／(b)後件のいずれも基底事象とすることができる。ただし、(a)が基底事象となる方が無標的で、(b)がそうするときには、トイウを挿入して有標性を示唆する必要が生じると考える。(トイウは有標性の標識といえる。)

3. おわりに

分析した表を通覧すると、筆者が総体修飾と認定するものが8例も含まれる、寺村は「外の関係」と考えたのにである。本稿は、基底核修飾を中心にその基底核の観点から分析を試みた。その結果、寺村秀夫が「内／外の関係」を指摘したのと同様に、表に分析した様相が見えてきた。そのような様相、あるいは、関係が見出せるが、その関係を唯一絶対のものであると主張するわけではない。筆者も釈然としないのは、基底核の認定についてだ。そこで、《自然基底核／論理基底核》という捉え方を最後に示して、本稿から次稿へつなぐこととする。

寺村秀夫の用例を分析する表

頁 No.	寺村秀夫の用例および備考	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
	5.2 発話、思考の名詞とその内容						
275 33	心は「薄米の上を歩く」[思い]だった。【備考】修飾節の範囲を修正。事象付与の解釈も可能。	思い	○	人	基底核	限定	内
275 35	自分は[鼠の最後を見る]気がしなかった。【備考】事象付与の解釈も可能。	気	○	自分	基底核	限定	内
	5.3 「コト」を表わす名詞とその内容						
	5.3.1 「事実」「事」「事件」「話」など						
276 36	[少納言と彼女(紫式部)が逢った][事実]は、未だ発見されない。	事実	△	φ	基底核	事象付与	外
276 37	一方、我が国の水稲は北支系に近い事を農学上指摘する説が存在してゐるが、然し又他方に、[南方文化要素と考へられるものが、我が古代農耕文化に普遍的に伴つてゐる][事実]があり、……	事実	△	φ	基底核	事象付与	外
276 38	彼は「九年前九州八幡に居住した」[事実]があり、出身は島根県です。【備考】修飾節の範囲を修正。	事実	△	φ	基底核	事象付与	外
276 39	サターン・ロケットについても、[先週サクラメントでの実験中に爆発した][事実]がある。	事実	△	φ	基底核	事象付与	外
277 42	彼ハ「九州ニ住ンダ」[コト] ガアル	コト	△	φ	基底核	事象付与	外
277 43	「片棒」は「ケチで強欲な赤西屋各兵衛が三人の息子に、自分が死んだら、どういう形で葬式をするかきいてみて、気に入った葬式の提案者に財産を渡そうとする」[話]である。	話	△	φ	基底核	事象付与	外
277 44	「今昔物語」にある「藤原保昌が大盗人袴垂保輔を招伏せしめた」[話]は有名であるが……	話	△	φ	基底核	事象付与	外
277 45	「八百屋さんが物陰で大根にこっそりどろろをぬりつけたのを、主婦が喜んで買って行く」[マンガ]があった。	マンガ	△	φ	基底核	事象付与	外
277 47	「[当日券は全部売り切って、補助券を出す][騒ぎ]よ」(五木寛之)	騒ぎ	△	φ	基底核	事象付与	外
278 48	(アメリカ映画の「ある夜の出来事」と、落語の「おせつ徳三郎」とは)自由な恋愛、結婚というものを通して、人間解放をよびかけるところ、そして、[劇の構成としての、クライマックスの結婚式場から花嫁が、自由をもとめて逃亡する][くだり]など、そっくりである。	くだり	△	φ	基底核	事象付与	外
	5.3.2 「結果」など						
279 50	皇漢二学を中心とするという方針は、東京へ移ってから大学の建設にも買かれようとした。／ところろがこれは両者の相克の中で、[社会的な要求を実質的に反映した洋学の勝利に席をゆずる][結果]となった。	結果	△	φ	基底核	事象付与	外
279 51	この数年、こういうわけか翻訳の注文がつきつきと重なり、いつの間にか「半職業的な翻訳者の末席に名をならねる」[結果]になってしまったが、そのことで一番驚いているのは、あるいは僕自身かもしれない。	結果	△	φ	基底核	事象付与	外

頁 No.	寺村秀夫の用例および備考					
	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
279	破目	×	私	基底核	限定	内
279	羽目	×	信吾	基底核	限定	内
279	身の上	○	私	基底核	限定	内
280	運命	○	この男	基底核	属性付与	内
280	宿命	○	推理小説	基底核	属性付与	内
280	風習	●	漁師	基底核	限定	内
280	風習	●	…婦人	基底核	限定	内
280	習慣	●	旦那様	基底核	限定	内
280	性質(♀)	○	川島留吉	基底核	限定	内
280	性質	○	君	基底核	限定	内
280	癖	○	ちか子	基底核	限定	内
281	例	●	事件	基底核	限定	内
281	例	●	単語	基底核	限定	内
281	例	●	{特別の…}	基底核	限定	内
281	歴史	△	φ	基底核	事象付与	外
281	歴史	○	ソ連	基底核	属性付与	内

寺村秀夫の用例および備考

頁 No.	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
281 68	過去	○	西宮左府	基底核	属性付与	内
281 69	経歴	○	ポップ	基底核	属性付与	内
281 70	記憶	×	{…墓地}	基底核	属性付与	内
281 71	覚え	×	曲	基底核	限定	内
281 72	覚え	×	私	基底核	限定	内
282 73	夢	×	ジミールイス	基底核	限定	内
282 74	過程	△	φ	基底核	事象付与	外
282 75	過程	△	φ	基底核	事象付与	外
282 76	可能性	△	φ	基底核	事象付与	外
282 77	公算	△	φ	基底核	事象付与	外
282 78	恐れ	△	φ	基底核	事象付与	外
282 79	怖れ	○	彼女	基底核	限定	内
282 80	憂い	○	人	基底核	限定	内
282 80	心配	○	人	基底核	限定	内
282 81	危険性	○	犯人	基底核	限定	内

……とすれば、[藤原によって圧迫された] [過去] を持つ西宮左府の後裔が、藤原文化に抵抗を感じ出すその反映が、武士や庶民の生活への愛情となって現われることは、極めて自然な推移であろう。
【備考】 この「過去」は「経験」に近い。

大才ポップです。[梵語と馬來語との同系を論じて、見事に失敗した] [経歴] もある。
 [本堂よこの墓地に、百日紅が桃色の花をいっぱい咲かせていて、つるつるした褐色の肌の枝が、手のとどこくはど低く、墓石の頭すれすれにひろがっていた] [記憶] がある。**【備考】** 修飾節の叙述の対象を「墓地」とみる解釈。また、事象付与の解釈も可能。「記憶」の対象としての「…墓地」で、主体関係は成立しない。

ピアノの音はまだ聞えている。それは「幾度も幾度もきいた」 [覚え] があるのに、いつまでもその名が思い出せない曲の一つだった。**【備考】** 「覚え」の対象としての「曲」で、同上。

歌舞伎や新派や新劇とは、感動の深さは違っているが、[こんなに心から笑った] [覚え] は今までにない。
 [舞台の上でジミールイスが入れ歯を失くし、トランペットが吹けなくなった] [夢] だった。
【備考】 事象付与の解釈も可能。

[高貴な身分に生まれ、幼時から源氏に引きとられて、次第に女性としての美しさを増して円満な人格を作り出す] [過程] は、作者が、せめてこのような女性もあれかしと膨ら上げた女性の理想像であろう。

「とりかえばや」の作者は男だといわれるが、[宰相に男装を見破られた女君が、宰相に肉体を許してから次第に女心にめざめて行く] [過程] は、男では到底かけるものではないということだけは、つけ加えておこう。

5.3.6 「可能性」およびその同類

282 76 [中国が西独の核技術導入をはかる] [可能性] がある。(朝日新聞)

282 77 [江南海岸の住民が何かの事情で団体的に倭国海岸に漂着したことによるものである] [公算] が多い。彼女はさしあたり、[強いて抑え付けようとするれば反動的に激発する] [恐れ] もある。**【備考】** 「恐れ」は「悪事の可能性」の意味。

282 79 彼女の怖れは、[今ここで、接吻したり、もう一度抱擁したりするようことを金田に仕出かされる] [怖れ] に変っていた。**【備考】** [(彼女が)……仕出かされる] [怖れ]

282 80 [獅子に襲われる] [憂い] もなく、(下にづく) **【備考】** 事象付与の解釈も可能。

282 80 [蜜族におびやかされる] [心配] もない。**【備考】** 同上。

282 81 東京・京都の場合は市街地の真中だけに犯行後、人の流れの中に素早く身を隠せるという利点がある。その半面、[いつ闇の中やホテルの窓から犯行現場を目撃されるかわからない] [危険性] もあるわけだ。**【備考】** 「危険性」は客観的判断による表現だが、「危険に対する感受性」とみなす。事象付与の解釈も可能。

頁	No.	寺村秀夫の用例および備考	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
		5.3.7 「作業」「仕事」「役割」など						
283	82	こんど設置される「呼出し機」は、[全議員にいっせいに電話がかかり、録音したテープを回しつづける] [仕掛け] になっている。【備考】事象付与の解釈も可能。基底核に関する「鼻が長イ象」型。	仕掛け	○	呼出し機	基底核	限定	内外
283	83	「軍艦マーチが流れたら、身に覚えのある者は素早く姿を隠す」 [仕組み] だった。【備考】同上。基底核に関する「鼻が長イ象」型。	仕組み	○	組織	基底核	限定	内外
283	84	水替人足は「坑内に湧き出る水を鉄桶で汲み上げ、手繰りや車引きで段々に上にあげて外に流し出す」 [作業] だった。	作業	△	φ	基底核	事象付与	外
283	85	私は、時間というものに「人間の心を次第に腐蝕して行く」 [作用] があることを、知ってはいなかった。【備考】事象付与の解釈も可能。	作用	○	時間	基底核	限定	内
283	87	一昨年から店頭で売らただけでなく、二階に座敷を三つほど増築し、そこで「スキ焼などの料理を出す」 [商売] をはじめた。	商売	△	φ	基底核	事象付与	外
283	88	武士は「剣戟を事とする」 [商売] である。	商売	△	φ	基底核	事象付与	外
283	89	和尚は頓智がすぐれた人で「狂歌をつくる」 [余技] があった。	余技	○	和尚	基底核	属性付与	内
		5.3.8 「方法」「準備」「資格」「目的」その他、内容の修飾節が「……スルタメノ」あるいは「……スルダケノ」ということを表わす場合						
283	90	【少数党が多数党に対抗する】 [方法] は本能的には言論である。【備考】事象付与の解釈も可能。	方法	●	(少数党)	基底核	限定	内
283	91	私たちが [リヨンへ入る] [準備] をしていた九月一日の未明…… 【備考】同上。	準備	●	私たち	基底核	限定	内
283	92	巨人が七回に宮田を送ったのは、[一点で逃げこむ] [策] である。【備考】同上。	策	●	巨人	基底核	限定	内
283	93	【この指跡の滴を、紙に写しとる】 [算段] は御座いますか。【備考】同上。	算段	●	あなた	基底核	限定	内
283	94	「どんなに悲しいことがあっても」、くみは、[当然のことのように思える] [修練] を積んでいた。【備考】同上。	修練	●	くみ	基底核	限定	内
284	95	【稲作のみのりを祝う】 [行事] が行なわれていたのも…… 【備考】属性叙述文が成立する。「鼻が長イ象」型。	行事	-	-	総体	限定	外
284	96	よせ。お前には「人を愛する」 [資格] なんかない筈だ。【備考】事象付与の解釈も可能。	資格	●	お前	基底核	限定	内
284	97	【それをひっぱり上げる】 [力] はもう残っていないかった。【備考】同上。	力	○	人	基底核	限定	内
284	100	俺には、「俺はもうお前がいやになった」と、女に面と向かって言い切るだけの勇気はおろか、[そう考える] [勇気] さえもなかった。	勇気	○	俺	基底核	限定	内
284	101	もともと二人は恋人でもなんでもないからこそ、[恋仲らしく見せる] [必要] があるのです。【備考】事象付与の解釈も可能。	必要	●	二人	基底核	限定	内
		5.4 感覚の名詞とその感覚の内容						
285	102	「宮女たちが群って水を掬み、布を洗っていた」 [姿] も画のように想像できる。【備考】修飾節の述語の項が基底核となる。	姿	○	(宮女たち)	基底核	限定	内

寺村秀夫の用例および備考

頁 No.	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
285 103	姿	○	{琵琶法師}	基底核	限定	内
285 104	姿	○	{山根}	基底核	限定	内
285 105	さま	○	{…乳}	基底核	限定	内
285 105	さま	○	{…おもて}	基底核	限定	内
286 106	形	○	いもり	基底核	限定	内
286 107	有様	○	{検校}	基底核	限定	内
286 108	気配	○	{だれか}	基底核	限定	内
286 109	けはひ	○	{…女達}	基底核	限定	内
286 110	ふり	△	φ	基底核	事象付与	外
286 111	先景	△	φ	基底核	事象付与	外
286 112	風景	○	{彼・彼女}	基底核	限定	内
286 113	シーン	○	人々	基底核	限定	内
286 114	空気	○	彼ら	基底核	限定	内
286 115	写真	○	{紅衛兵}	基底核	限定	内
286 116	絵	○	{…女性}	基底核	限定	内
286 117	顔	○	{牧野さん}	基底核	限定	内
286 118	音	○	{なにか}	基底核	限定	内
286 118	音	○	{樹の枝}	基底核	限定	内
287 119	聲音	○	{誰か}	基底核	限定	内
287 120	声	○	{覺円尼}	基底核	限定	内

十三世紀初頭に書かれた「無名抄」には、[琵琶法師が小盲目を連れて、東海道を鎌倉へと下って行く]
[姿] も書き留められているのである。【備考】同上。

初子は最後に、愛に見せかけた微笑を投げると、さささとそこを出た。[うしろのほうで山根の突っ立っている]
[姿] を背中を意識した。【備考】修飾節の範囲を修正。同上。

私はそれを見たとは云はないが、[暗い茶碗の内側に泡立ってある驚いろの茶の中へ、白いあたたかい乳がほとぼしり、滴たりを残して納まる]
[さま]、[下につづく] 【備考】同上。

「静寂な茶のおもてがこの白い乳に濁って泡立つ」[さま] を、眼前に見るようになりありと感じたのである。
【備考】同上。

自分はいもりを驚かして水へ入れようと思った。[不器用にからだを振りながら歩く]
[形] が想われた。生前
[検校がまめめしく師につかえて影の形に添うように厩従っていた]
[有様] が思われ……

【備考】修飾節の述語の項が基底核となる。

[だれかが病室の扉をそと開ける]
[気配] がする。【備考】同上。

[なかの女達がいっせいに振り向いた]
[けはひ] で、菊治は赤くなりながら…… 【備考】同上。

聖堂でも私は[自分に与えられた映像イメージ]にしたがって敬虔に祈る]
[ふり] をしていた。

藤惣とよぶ囚人がある日の午後、自分たちの年の小さな窓に顔を押しあてていると、[二人のやせこけた子供が嬉しつかまえ、それを口に運んでいる]
[先景] が見えた。／子供たちがほとんど食事らしい食事を与えられていないことが、これでわかった。【備考】修飾節の叙述の対象を基底核「子供たち」とみると、属性付与となる。

[アベックで来て、彼は中ジョッキ、彼女は大ジョッキを前にしてむつまじく語り合っている]
[風景] も珍しくない。【備考】主名詞「風景」から、修飾節の叙述の対象を基底核「飲食店」とみることでもでき、解釈が変動する。また、事象付与の解釈も可能。

[肩を叩いたり握手をしたりする]
[シーン] があちこちで見られた。【備考】事象付与の解釈も可能。彼らは
[緊張感の中にも、干渉のない解放された合宿生活を、むしろ楽しんでいる]
[空気] さえあった。【備考】「空気」は「雰囲気」に近い。

[紅衛兵が線路の上を歩いている]
[写真]。【備考】修飾節の述語の項が基底核となる。

[大きな眼の女性が扇を手にしてかすかにほほえんでいる]
[絵]。【備考】同上。

そのつど
[牧野さんの苦笑いする]
[顔] が目に浮かび…… 【備考】同上。

冬になると流石に箱から出されたが朝夕が寒かった。裏山で「なにかが弾けるような」
[音] がした。(下につづく) 【備考】同上。

[樹の枝が冷気で折れる]
[音] だ。【備考】同上。

[誰か唐紙の向うを通る]
[聲音] を 【備考】同上。

[覺円尼が、おめ、おくみか、といった]
[声] が 【備考】同上。

頁	No.	寺村秀夫の用例および備考	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
287	121	[魚の焼ける][匂い] 【備考】同上。	匂い	○	{魚}	基底核	限定	内
287	122	[誰かが魚を焼いている][匂い] 【備考】同上、ヲ格の例。原文には修飾節/主名詞の標示がない。	匂い	○	{魚}	基底核	限定	内
287	123	[玉子の腐った][匂い] 【備考】修飾節の述語の項が基底核となる。	匂い	○	{玉子}	基底核	限定	内
287	124	[誰かが葉巻を吸っている][匂い] 【備考】同上、ヲ格の例。原文には修飾節/主名詞の標示がない。	匂い	○	{葉巻}	基底核	限定	内
287	125	パジャマの上衣をとると、ひやりとした空気が肌にしみる。左手をあげて、私は[看護婦のカミソリが腋を動く][感触]を笑いをこらえながら我慢する。【備考】修飾節の述語の項が基底核となる。	感触	●	{…カミソリ}	基底核	限定	内
287	126	5.5 「相対性」の名詞と、その相対概念の補充(「逆補充」)						
287	126	[近代教育の制度や内容を西洋のモデルにしたがって、つくり出そうとした][結果]は、かえって、内からの変革の力を弱めてしまったともいえる。	結果	△	φ	基底核	事象付与	外
287	127	[私たちが勉強ヲシテイル][上] デ維カが柔道ノ練習ヲシテイタ 【備考】寺村が名詞の「相対性」を指摘する用例。	上	○	空間	基底核	限定	内
288	128	息をのんで急停車。[砕けるようにタイヤのきしむ][前]を、右手の雑木林からとびだした若い女は……左手の煙を駆け去った。【備考】同上。	前	○	空間	基底核	限定	内
288	129	[文字が坐った][うしろ]の窓には、もみじが青かった。【備考】同上。	うしろ	○	空間	基底核	限定	内
288	130	[空地を隔てた][向う側]の鎮守のある岡の杉林が美しい緑に光っていた。【備考】[空地を隔てた][向う側]の空間。同上。	向う側	○	空間	基底核	限定	内
288	131	[彼の家の焼けない][前]にもおのずから僕に火事のある予感を与えないわけには行かなかった。【備考】この「前」は、過去のある時期を指す。	前(=往時)	-	-	総体	限定	内
288	132	[太田夫人が持主であった][前]に、この水指が出来てから三、四百年ものあひだに、どんな運命の人の手から手へ渡って来たのだろうか。	前(≠往時)	○	期間	基底核	限定	内
289	133	[汽車や汽船や自動車が発明されなかった][前]に、早くも空中船を夢みた所に、學術の進歩が暗示されようけれども、さりとてラセラスとブレリオを同一視することは出来ない。【備考】№131に同じ。	前(=往時)	-	-	総体	限定	外
289	134	[大阪へ出てきた][四、五年前]から天六界隈いをうろつく不良仲間に入った。	四、五年前	○	トキ	基底核	限定	内
289	135	彼は[行く][先々]で面倒をひきおこした。【備考】「先々」は「訪問先」の意味。「先々へ行く。」	先々	-	-	総体	限定	内
289	136	[逮捕される][前日]、四月二十一日の夜は、新宿にいた。(週刊朝日)	前日	○	トキ(日)	基底核	限定	内
289	137	[ある精神病院の門を出た][後]、僕はまた自動車に乗り、前のホテルへ帰ることにした。	後(了)	○	トキ	基底核	限定	内
289	138	光夫は藤沢市役所に宛て抄本の送付方を手紙で依頼した。滝村英子の側から言えば借しことに、それは[彼女が市役所の窓口で問合せた][一か月後]であった。【備考】原文は、「一か月」だけを主名詞とする。	一か月後	○	トキ(日)	基底核	限定	内
289	139	このごろ自分は、「深酒をした」[翌日]には、以前にも増してなげない気持ちに襲われる。(下につづく)	翌日	○	トキ(日)	基底核	限定	内

寺村秀夫の用例および備考

頁 No.	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
289 139	とりわけ、[不]行儀な飲みかたをした[翌日]は、やりきれなさを通り越して肉体的に胸がむかむかする。	○	トキ(日)	基底核	限定	内
289 140	でも[母が死んだ][翌日]から、私は母をだんだん美しく考へるやうになりましたの。／私が考へるんぢやなく、母がひとりですて美しくなってきたといふのでせうか。	○	トキ(日)	基底核	限定	内
290 141	[夜の間に強い雨が降った][朝]、それこそ拭い去ったように空が晴れた時に、大和の原を遠望したことがあった。【備考】属性叙述文が成立する。「鼻が長イ象」型。	—	—	総体	限定	内外
290 142	昭和三十六年の秋、文芸春秋社の講演旅行で山陰へ行った。[米子に泊った][朝]、私は早く起きて車を備い、父の故郷に向った。【備考】この「朝」は「翌朝」の意味。「前日(ノ夜)」を基底核とする。	●	前日(ノ夜)	基底核	限定	内
290 143	(酒場の電車内広告)／[会社で上役に叱られた][帰り] 【備考】修飾節の述語の項が基底核となる、デグの例。「酒場の…」は情報提示。	○	(会社)	基底核	限定	内
290 143	(上からつづく)[友だちとけんかした][帰り] 【備考】基底核が、デグの例。	○	会社	基底核	限定	内
290 143	(上からつづく)[何となく上役がかわいく見えた][帰り]／……／…… 【備考】同上。	○	会社	基底核	限定	内
290 144	その日の午後、昌子は[買物にでた][帰り]に、若宮大路にある鎌倉彫の源氏堂によった。【備考】修飾節の述語の項が基底核となる、二格の例。	○	(買物)	基底核	限定	内
290 145	おかみさんは[お使いに出了][留守]であった。女中は無愛想に私を迎え、がたんとビール瓶を置いて栓を抜いた。この花見の季節、留守番を仰せかつたのでお客に当たっていた。	○	おかみさん	基底核	属性付与	内
290 146	そんなことをいう人は、[空襲警報でどこかの駅へ降された][ついで]に、売れ残りの耳かきでも買ったことのあるのがせいぜいだ。【備考】「ついで」は、本来的事項に付随する同時的機会を指す。前者を基底核とするが、構造的にゼロ基底核として処理する。	△	φ	基底核	事象付与	外
290 147	日本は第一次大戦時には、[ヨーロッパ諸国の勢力が東洋市場から手をひいた][そのすき]に、中国、南洋へのり出してボロ儲けをした、いわゆる成金時代であったが…… 【備考】「すき」は「不在」に近い。修飾節の述語の項が基底核となる。	○	(…勢力)	基底核	限定	内
290 148	云うと思うと、人魚の体は海月のように淡くなって、[やがて米の溶けるが如く消え失せた][跡]に、二三尺の、小さな海蛇が、水黽の中を浮きつ沈みつ、緑青色の背を光らせ遊いでいました。	○	人魚	基底核	属性付与	内
291 149	弥平は、丁重に礼をのべて彦七の蒙を出た。[定友から大滝へもどる][途中]に考えた。	○	(戻り)道	基底核	限定	内
291 150	[弥太夫や間瀬九右衛門がずうずうしく聞き直った][背後]に、もっと強力な誰かがついていたのではないか。【備考】「二人」は「弥太夫や間瀬九右衛門」。修飾節の述語の項が基底核となる。	○	(二人)	基底核	属性付与	内
291 151	よれよれのジャツの胸をはだけた小さく覆せた爺さんが、[おかっぱの五つぐらいの女の子を腰かけさせた][横]で、立ったまま呼んでいた。【備考】修飾節の述語の項が基底核となる、ヲ格の例。	○	{…女の子}	基底核	限定	内
291 152	洋館の階下の便所は[内海の修殺された][隣り]だから、御婦人連がそこを避けるのは当然だった。私にはこういう気持がある。[早く田舎へ帰りたいと思う][半面]に、最後まで東京に執着していたいと思う気持がある。何か面白くない出来事の起こるたびごとに、その両様の気持をはっきり感ずることができる。【備考】「半面」は基底核「気持」を要求する。また、「気持」も基底核を要求し、修飾節による基底核修飾となつて、[修飾節]⇒「気持」⇒「半面」と二重基底核構造を形成する。	○	空間	基底核	限定	内
291 153		○	気持	基底核	(限定)	外

頁	No.	寺村秀夫の用例および備考	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
291	153	【参考】「早く田舎へ帰りたいと思う」【備考】「早く田舎へ帰りたいと思う」【私】。「気持」に對する基底核修飾。基底核に対しては、総体修飾となる用例が多いが、稀に基底核修飾となる用例もある。	気持	○	私	基底核	限定	内
291	154	【聞いているうちに話が疑わしくなる】「一方」で、とうとう相手はこんな大げさなことを云いだした。	一方	△	φ	基底核	事象付与	外
291	155	この「隠」という言葉は、[単に人の世から隠れることを意味する] [反面]、逆にそれが……かえって一つの積極的な意味をもつ人と考えられたのである。	反面	△	φ	基底核	事象付与	外
291	156	【小さい寺が占在する】[ほか]は、飛鳥川が流れるだけの平凡な村里になっている。	ほか	△	φ	基底核	事象付与	外
291	157	【事務的な用事で電話して来る】[他]は手紙一本よさなかった。	他	△	φ	基底核	事象付与	外
291	158	女御更衣の君寵の争いは、[家と家との対抗によって拍車をかけられることもない] [かわり] に、それらに仕える女房たちの競争心も薄れた。【備考】「かわり」は「反面」に近い。	かわり	△	φ	基底核	事象付与	外
291	159	(この記事は) [倭国が漢人の注目をひいて、東洋史の上に文獻として姿を現わす] [最初] である。左内は翌年、二十四歳で江戸へ去った。その別れに臨んで、彼は香苗に向かって、「こんど帰って来たら」という一語を残した。それが「彼と会った」[最後] であり、彼の言葉を聞いた最後であった……こんど帰って来たら。左内は何を云う積りであったろう。【備考】事象付与の解釈も可能。	最初	○	記事	基底核	限定	内
292	161	(この青年は) [福山市が空襲を受ける] [当日] まで、その町の帝國染料会社に勤めていた。【備考】「当日」は「あるコトの日」。	最後	○	トキ(日)	基底核	限定	内
292	162	【大阪に移った】[当座]、彼は社会面を氣をつけて見ていた。【備考】「当座」は「あるトキの後、しばらく」。	当日	△	φ	基底核	事象付与	外
292	163	【全国で推せんされた】[中] から……	当座	○	トキ(日)	基底核	限定	内
292	164	【闘争の輪を拡げていく】[中] で…… 【備考】文脈が不明なため、仮に基底核「組織」としたが、基底核「状況」(事象付与)とすることも可能である。その場合、二重基底核構造となる。	中	○	人・モノ	基底核	限定	内
292	165	【賛成反対で沸きたっている】[渦中] へ…… (アサヒジャーナル) 【備考】仮に基底核「混乱」と考えたが、これも二重基底核構造である。	渦中	○	組織	基底核	限定	内
292	166	住職の田山道詮和尚は、父と禪堂における友であった。道詮和尚も父も、[三年にわたる禪堂生活を、そのあひだ起居を共にした] [仲] であった。【備考】「仲」は「関係」の意味。	仲	○	混乱	基底核	事象付与	外
292	167	【彼女の結婚した】[相手] がこの波太吉でなかったら…… 【備考】「彼女ガソノ相手ト結婚した。」	相手	-	道詮和尚と父	基底核	限定	内
292	168	【生活の水準が全然違っている】[同志] が結婚して…… 【備考】二人は状況が異なることで、相互に「違ふ」と言えることが表現的に共通する「同志」である。不思議な用例。	同志	○	-	総体	限定	内
292	169	貴ノ花が信じられないような負けを二日も続けた。先場所の途中にかぜをひき、体調をこわしたが、それも回復して、こんどこそと期待されていたのに。【負け】 [相手] が相国と栃東。(下につづく) 【備考】「相手ニ負けた。」	相手	-	人	基底核	限定	内
292	169	【不安とされた】[体負けする] [相手] でもないのにどうしたことだろう。【備考】「相手ニ体負けする。」	相手	-	-	総体	限定	内
292	170	けれどもたった一つ、おきんには [兄さんが帰って来てほしいと思う] [理由] があった。それはこうである。	理由	△	φ	基底核	事象付与	外

寺村秀夫の用例および備考

頁 No.	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
293 171	理由	△	φ	基底核	事象付与	外
293 171	理由	△	φ	基底核	事象付与	外
293 173	…原因	△	φ	基底核	事象付与	外
293 174	要因	△	φ	基底核	事象付与	外
293 175	結果	△	φ	基底核	事象付与	外
293 176	情性	●	仲買人	基底核	属性付与	内
293 177	反動	△	φ	基底核	事象付与	外
294 178	拍子	△	φ	基底核	事象付与	外
294 179	残り	○	食物	基底核	限定	内
294 180	おつり	○	金銭	基底核	限定	内
294 181	余り	○	セメント	基底核	限定	内
294 182	はずみ	○	身体	基底核	限定	内
294 183	報酬	●	人	基底核	限定	内
294 184	煙	○	(炬)	基底核	限定	内
294 185	勢い	○	…連合軍	基底核	属性付与	内
294 186	動揺	○	圭三	基底核	属性付与	内
294 187	ショック	○	母	基底核	属性付与	内外
294 188	痕	○	先生	基底核	限定	内
294 189	…傷あと	○	背中	基底核	属性付与	内

ここ(平家物語)に描かれている人々は、同類の物語には見出し得ない人間造型を加えられているのである。そして、これこそが、[この物語にいたって初めて人間武人ともいべき武人の合戦物語が生まれたといわれる]「理由」であり、(下につづく)

また[この物語が、語りものの文芸として長い生命を持ち、広い支持を得た]「理由」であると思う。
 [(牧野さんと私が) 気抽くなつた]「一つの原因」は、私が絵をうまく描くと法螺を吹いたことであつた。

ブラウダ、イズベスチャ各紙は、[西独と中国が“政治的に”接近しやすい]「要因」としてつぎのようなものをあげている。

伊藤の暗殺されたのは、すでに統監をやめてはいたが、[韓国人のこういううらみが凝集した]「結果」であつた。

敗戦後まだ間もないときであつたので、野菜の仲買人は軍隊用語に何か威力のやうなものでも感じて怖けたものと思はれる。[戦争中に軍隊用語に対して一もく置いてゐた]「情性」だろう。【備考】「情性」は「習慣」に近い。事象付与の解釈も可能。

静子さんは、家族のこれまでもを克明にふり返つた。さほど甘やかしたり、わがままさせたりはなない。勉強しろとせつていた覚えもない。[祖父が厳しかった]「反動」で、夫も自分も、むしろ自由に好きなことをやらせてきた。

[よろめいた]「拍子」に私は彼女にぶつかった。【備考】「拍子」は「はずみ」に近い。

[私が食べた]「残り」

[たばこを買つた]「おつり」で 【備考】「ソノ金銭デたばこを買つた。」

[工事に使つた]「余り」のセメントを…… 【備考】「使つた」セメントに対して「余り」。

[押した]「はずみ」で…… 【備考】「はずみ」は「勢い」に近い。文脈がないため推測すると、「身体デ押した」。

[一年中村あるきをした]「報酬」の中から 【備考】基底核「労働」とも解釈できる。

[炬を焼く]「煙」は……

新羅と唐の連合軍は「百済を屠つた」[勢い]を駆って、この国へ押し寄せて来ないとも限らなかつた。圭三は胸騒ぎがした。[異常なものを見つけた]「動揺」がしばらく続いた。【備考】「圭三」が定指示のため、限定ではなく属性付与となる。「動揺」は人の心理であるため、人の介在を要件とする。事象付与の解釈は適さない。

母が脳溢血で倒れた。[自分の国と、夫の国とが、敵同志となつた]「ショック」も、その原因だろう。【備考】「母」について属性叙述文が成立する。基底核に關する「鼻が長イ象」型。「ショック」は上の「動揺」に準じる。

先生の背中には、[さつき縁台の上に仰向きに寝た]「痕」が一杯ついていた。

背中には[袈裟がけに切られた]「大きな傷あと」がある。二回も切つたので傷あととはそこだけふくれている。

頁	No.	寺村秀夫の用例および備考	主名詞	主体	基底核	構造	作用	関係
294	190	その赤漆のところに、黒い漆塗のところに、[よごれた手で触った]「指跡」が歴然と残っている。	指跡	○	漆の表面	基底核	限定	内
294	191	そこが飲み口なのだろうか。／茶碗がついたと見える。しかし「唇をあてた」[よごれ]もあるかもしれない。／……／(下につづく)	よごれ	○	茶碗	基底核	限定	内
294	191	[文字の母の口紅がしみこんだ]「あと」なのだろうか。	あと	○	茶碗	基底核	限定	内
294	192	[明治大正の日本のスコラ哲学者たちが、「ファウスト」でいみじくもいっている大衆を「鼻をつかんでひきまわす」ために、わざとしちむずかしい言葉を発明した]「名残り」である。	名残り	△	φ	基底核	事象付与	外
295	193	[彼がその大金の一部でも使った]「形跡」は無かった。【備考】事象付与の解釈も可能。	形跡	○	{彼}	基底核	限定	内
295	194	ある農家の主人が収獲したジョウガを保存する穴を掘っていた。大きな石がクワに当たった。取除けようと周辺の土を払うと、切石の面があらわれた。穴掘りをあきらめたその人は、間もなく死んだ。／「塚を掘った」[タタリ]だ」というわがさが広がった。	タタリ	○	{塚}	基底核	限定	内
295	195	これも「美奈子を殺した」[罰]といえはばえそうだが、宗三はそう考えたくなかった。【備考】「罰」の基底核として「罪」を認めることも可能だが、事象付与の解釈が自然といえる。	罰	△	φ	基底核	事象付与	外
295	196	薄い霧の降りた場末の町筋は、[とうに店を仕舞った]「静けさ」である。【備考】「町筋デとうに店を仕舞った。」	静けさ	○	…町筋	基底核	限定	内
295	197	[自分の孤独を充分意識し、それを徹底的に憎む]「涙」であった。【備考】「人」は「涙」の臨時的主体。「涙」を《悲しむ人》の比喩とする解釈も可能。	涙	●	人	基底核	限定	内
295	198	家光は、[十兵衛の居なくなつた]「淋しさ」に耐えかねて、その弟の友矩を召出さずにいられたかったのかも知れない。【備考】感情を表す抽象名詞は、人を主体とする。	淋しさ	○	家光	基底核	限定	内
295	199	「そうですか」／彼女は馬鹿みたいに答えた。空いたダンボールを引き寄せ、その中に新聞屑を押し込みながら、自分の今の呆けた応え方への気がかりと、[往かせたい相手に居坐らせている]「落ちつかなさ」と、(下へつづく)	落ちつかなさ	○	彼女	基底核	限定	内
295	199	そして[往かれぬうちに親密な一時をもちたい]「焦り」とに、話題を漁る。	焦り	○	彼女	基底核	限定	内
295	200	いずれは逢ふ運命にあるといふ気持が、[その機会を待つてゐる]「不安」から逃れたいといふ気持にな	不安	○	人	基底核	限定	内
295	201	「ミス・リーを男と思ひ違へられた」[おかしさ]で、藍子はにっこり笑った。【備考】「藍子ガ、ミス・リーを男と思ひ違へられた。」に変換すると、間接受動文である。	おかしさ	○	藍子	基底核	属性付与	内外
296	202	[足のしびれの解けかかる]「気色のわるい心許なさ」に……【備考】基底核に関する「鼻ガ長イ象」型。	…心許なさ	○	人	基底核	限定	内外